

自己同一性と刹那滅性

-ナーガールジュナの「空」とパルメニデスの「夢」の対比において-

[要旨]プラトンの『パルメニデス』と、ナーガールジュナの『中論』と、フレーゲの『算術の基礎』を背景に、ナーガールジュナの「空」とパルメニデスの「夢」を対比させ、それらを、フレーゲの提唱した空集合と、空集合「のみ」を含む1者である「1」の概念によって解釈理解しようとする試み。

[ナーガールジュナ『中論』とプラトン『パルメニデス』との類似性]エレア派の哲学者パルメニデスは、あらぬはあらぬのであり、万有は一者である、つまり、世界はノッペラボーのただ一者であるとも、また、静止しており球形である、と主張した。ところが、プラトンの対話編『パルメニデス』に登場するパルメニデスは、むしろ、万有は一でもなければ多でもなく、静止しているのでもなければ運動しているのでもない、大きくあるのでもなければ小さくあるのでもない、とまるでナーガールジュナの『中論』において宣説される、不一不異、不去不来、不増不減、を説くかのようである。

[パルメニデスの「夢」]パルメニデスはいふ。「たといその最小[部分]と思われるものをとってみても、まるで眠っているときにみる夢と同様、今まで一つと思われていたものが、突然いれかわって多となり、極小のものだったのが、たちまち入れかわって - 今まで一つだったものがたくさんの断片(かけら)になって砕けると、それに対しては - [今度は]むやみに大きく見えたりするのだ」と。これは、この世界において、実体(個体)として数えられるモノ、自己同一なモノは全く何もない、すべての事物が相対的であり刹那滅しており無秩序であり無限定(ト・アペイロン)であるような、まるで「夢」といいいい風景である。これをパルメニデスの「夢」とよぼう。

[フレーゲ『算術の基礎』における空集合の定義]現代数理論理学の基礎を築いたフレーゲは、空集合 \emptyset を、自己非同質な事物のクラス、と定義した。自己非同質な事物とは、 $x \neq x$ 、であるようなモノのことである。むろん、世の中に、自己非同質な事物は「全く・ない」はずなので、空集合は要素を全く含まないとされる。しかし、般若經典類には、AはAであって、而して、AはAに非ず、とのフレーズが頻出するのはあまりにもよく知られている。論理式で書けば、 $(A = A) \wedge (A \neq A)$ 、でありこれが事物の空性であるとまでいわれるのである。奇しくも、フレーゲによる空集合 \emptyset の定義と、般若經典類の説く「空」は全く一致するといえよう。さらに、数学における1者は、空集合 \emptyset のみをその要素として含む論理的原子(logical atom)なのであって、 $1 = \{ \emptyset \}$ 、と定義されるのである。